

現場で出会った懐かしい友人のこと-自己紹介にかえて-

岡村 毅

はじめまして、ふるさとの会の顧問医の岡村毅と申します。東京大学医学部と東京都健康長寿医療センター研究所で研究をしています。尊敬する佐藤先生より「徒然なるままに」エッセイでも書くようにと御指名を受けましたので、文才はないことを自覚しつつ定期的に連載させて頂こうと思います。基本的にはふるさとの会のことを個人的な視点から書いていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

初回ですので自己紹介を兼ねて書きたいと思っています。

私は東京育ちですが、中学から親元を離れて遠方の某進学校に6年間行き、大学から東京に無事戻りました。卒後は初めは外科系に籍を置きましたが、その後精神科に進み、いつの間にかふるさとの会さんと協働しています。

さて中学、高校というのは自己が形成されるとも重要な時期ですし、私は家族から離れてましたのでなおさらかもしれませんが、多感な少年の多くがそうであるように、「なぜ自分が存在するのか?」とか「自分は社会の中で何をすべきか?」とかずいぶん悩みました。今振り返ると本当にわかっていたのかなあとと思いますが、哲学にも興味を持ち、ハイデガーとかヘーゲルとか、あるいはフーコーとか、いろいろ読みました。翻訳を読んでも全く分かりませんので、西研先生らによる解説の本をずいぶん読みました。ニューアカブームも終わっていましたが、このブームの代表格の一人である蓮實重彦先生(本人は不本意だというのはわかっています)がちょうど東大の総長であられ、入学式で蓮實先生の話聞いた時はとても感動しました。あの独特の文体と違い、ずいぶん分かりやすく話すのだなあと思ったことが記憶に残っています。

もともと、観念的な哲学への興味などというものは長続きせず、医学部の病院実習が始まると哲学書を読むこともなくなり、かわりにプールで泳ぐこと、あるいは水泳を教えることが習慣になりました。当初は精神医学に憧れを抱いていたのが、徐々に私は外科系に惹かれていきました。まあ「手に職をつける」というと短絡的ですが、外科手術は具体的で実際的でした。

しかし医師になって2年目、ある救急救命センターで働き、内なる炎が再び燃え出したのです。ここで見たものは社会の矛盾そのものでした。それまで見えなかった

人々を目の当たりにし、戦慄し、こころや行動の科学に再度心惹かれたのです。それまで何と世間知らずの甘ちゃんだったことでしょうか！

やがて精神医学の道に進み、それなりにいろいろな経験をしてきました。見田宗介先生（社会学）は東大の講義で「始まりの炎を大切に」と仰っていたように記憶していますが、私の始まりの炎はこころの科学であったのです。心病む方に励まされることもありましたし、感謝されて嬉しかったこともあれば、逆に狡猾で破壊的な方に絶望したこともありました。学位や専門医も取得し、この業界のこともだいたいのは分かってくるつもりでいます。でもそうすると、外の世界を見てしまうのが私の特性のようです。制度の外にいるため普通の外来では見えない人々、例えば人を信じる事が出来ずに医者に適切にかかることができない人、所属する場所を持たず定住することもなく定期的な受診もしない人、精神医学では病名がなかなかつかないけれども確かに生きづらさを抱えた人、、、自らの勇気と信念と実行力を頼りにこういった方々を支援している「ふるさとの会」を知り、いつの間にか仲間になっていました。

ふるさとの会の支援論はすでに本（佐藤ら「生きづらさを支える本」言視舎 2014年）にまとめられているのでご存知の方も多いたと思いますが、私はこれを読んだ時には感動を禁じえませんでした。ここでは、支援者が陥りがちな押し付けがましさを排し、対象者の気持ちになって世界を理解してみる、という姿勢は「判断停止＝エポケー」という言葉を与えられています。これはご承知のように哲学（現象学）用語です。昔読んだ哲学が（こういう使い方を嫌う人がいるかもしれませんが）ここでは生きている、冷たい学問ではないのだ、と思ったのです。この本は素晴らしい本ですので、まだ買われていない方は是非ご購入ください。

その後、縁があって元ホームレスの方等のための宿泊所でしばらくお手伝いした時に、喫煙所の本棚にレヴィナス（20世紀のフランスの哲学者）が置いてあったのです。孤独な人生の旅路の果ての、つかの間の他者との共同生活の場にレヴィナスとは……。非識字者の方も多いのですが。現在ではこの本を置いたスタッフAさんによる利用者の方々を巻き込んだ読書会が開かれていると聞きました。後日、西研先生とふるさとの会の勉強会でお会いし、勝手に高校時代の恩師に出会ったような気持ちになりました。幸いなことに本で読む以上に魅力的な方でした、会って失望という人もいますから嬉しかったです。

臨床哲学という運動もあり、また文献学も十分に価値があり、決して主流の哲学を悪く言うつもりはありません。しかし、生活困窮者支援の現場で出会った懐かしい友人（そう、哲学のことです）には驚くとともに、その本来の力を見なおしているところでは、君、やっぱりやるじゃないか、と。いや自分がようやく哲学のよさがわかるようになっただけかもしれません。「結局実際に応用したものしか頭に残らない」とゲーテも言っています。結論として今回の主旨は以下のようになります；思春期に哲

学をかじったような方はぜひふるさとの会を応援ください、ここでは哲学が現場に応用され、生き生きと活動しています。

こんな感じで、徒然なるままに書いていこうと思いますので、どうぞよろしく願いします。あまり医学のことは書かないかもしれませんがご容赦ください。なおこのエッセイの内容は担当者個人の見解に基づいており、所属する学術機関の見解を示すものではありません。無断転載を禁じます。